

京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

1. 研究課題

フーコー研究—人文科学の再批判と新展開

Foucauldian Studies : Reassessment and New Developments in the Human Sciences

2. 研究代表者氏名

小泉義之

KOIZUMI Yoshiyuki

3. 研究期間

2017年04月 - 2020年03月 (3年度目)

4. 研究目的

今日のおおよそコーパスが確定されつつあるミシェル・フーコー(1926・84)の膨大な仕事の中核には、西洋近代に淵源する「人文科学」の歴史的批判の試みが置かれている。実証研究の再読と哲学的考察を交差させ、狭義の認識論に還元されない政治的・実践的な射程をもつフーコーの仕事は、現在もなお世界の人文・社会系諸学において避けて通れない参照項であり、その重要性はますます高まりつつある。だが、フーコーを方法論として応用しようとする試みや、それぞれの分野でフーコーを継承もしくは批判しようとする取組みのなかでは、フーコー自身の仕事の変遷や内的一貫性が顧慮されることは必ずしも多くない。また、フーコー自身の仕事を対象とする研究はもっぱら哲学史や思想史の領域で行われ、フーコー自身が再検討の対象とした「人文科学」諸分野の動態にまで遡ってフーコーの仕事の意義を究明する研究は稀にとどまっている。本共同研究は、「人文科学」諸分野の第一線の研究者を結集し、フーコーの仕事総体の意義を現在の「人文科学」研究者の観点から多角的に明らかにするとともに、フーコーによる「人文科学」批判の歴史的価値と現時点でのその可能性を見きわめることをめざす。

At the center of Michel Foucault's colossal work, whose corpus is nowadays almost completed, one finds his attempts at a historical criticism of the "human sciences" originating in Western modernity. Foucault's work, which lies at the intersection of reviews of empirical research and philosophical speculation, has a wide political and practical range, which is not reducible to simple epistemology; it constitutes an indispensable reference in human and social sciences, the value of which is more and more important in today's world. Yet, among the attempts to apply Foucauldian

methodology in one's own field by either adopting or criticizing Foucault's position, those that analyze in depth the changes as well as the inherent consistency of his work are not numerous. Moreover, while Foucault's work is mainly examined from within the framework of the history of philosophy or the history of ideas, attempts at determining the significance of Foucault's own reexamination of the historical and contemporary movements in the different fields of "human sciences" remain rare. The objective of this research seminar is to enable leading researchers in various fields of the "human sciences" to work together in order to bring out the significance of Foucault's work in its totality, and to determine the historical value and actual potential of Foucault's criticism of the "human sciences".

5. 研究成成果の概要

本共同研究は、2017年度および2018年度はそれぞれ5回(各2日)、2019年度は4回(各2日)の例会を中心に、例会の一部を研究班外の研究者を招いての公開研究会やシンポジウムとして一般公開しつつ、さらに折々に単独の公開講演会や公開セミナーを織り交ぜて、進められた。例会における研究発表は、公開されたものも含め、2017年度23本、2018年度25本、2019年度21本、総計69本を数える。本共同研究にかかわる成果として刊行された著書(単行本)は、2017年度6冊、2018年度3冊、2019年度4冊、計13冊、論文は、2017年度3本、2018年度19本、2019年度19本、計41本に上る。2019年度には本共同研究の「中間報告」として、『思想』(岩波書店)9月号の特集「未完のフーコー」を刊行した。本共同研究は、制度的には、2019年度をもって終了するが、2020年度もイベントの開催、ホームページの維持を通じて、事実上、研究班のユニットを存続させつつ、一年間をかけて最終報告書を編集し、2021年3月の刊行を目指す。

6 共同研究会に関連した公表実績

【出版】〈中間報告書〉『思想』(岩波書店)9月号「未完のフーコー」(本研究班中間報告書を兼ねる:小泉義之「(思想の言葉)啓蒙と霊性」、藤田公二郎「生命的・主権的複合体——フーコーの人文科学批判の射程」、佐藤淳二「フーコーと表象のリミット——〈ラモアの甥〉から〈ルソー〉へ」、王寺賢太「ヘーゲルを模倣するフーコー——『狂気の歴史』のラモアの甥論をめぐって」、ダヴィド・ラブアン(隠岐さや香訳)「数学という例外」、立木康介「まなざし、鏡、窓——フーコーとラカンの『侍女たち』(上)」、中井亜佐子「旅する理論——エドワード・サイードはフーコーをどう読んだか」、上田和彦「告白とパレーシア——隷従化されない主体化を求めて」、上尾真道「狂気と生権力——70年代フーコーの精神医学研究」、箱田哲「人民の回帰?——フーコー戦争論のポテンシャルティ」〈著書〉小泉義之『ドゥルーズの霊性』(河出書房新社、2019年6月)長原豊『敗北と憶想——戦後日本と〈瑕疵存在の史的唯物論』(航思社、2019年7月)田中祐理子『病む、生きる、身体の歴史——近代病理学の哲学』(青土社、2019

年 5 月) 森本淳生(共編著)『マルグリット・デュラス(声)の幻前』(水声社、2020 年 3 月)〈論文〉小泉義之「類としての人間の生殖」『思想』2019 年 5 月号、pp. 8-26 小泉義之「天気の大入——二一世紀初めにおける終末論的論調について」『現代思想』2019 年 11 月号、pp. 20-26 立木康介「まなざし, 鏡, 窓——フーコーとラカンの『侍女たち』(下)」『思想』2019 年 12 月号、pp. 77-101 佐藤嘉幸「ヘーゲルの主体のアレゴリーとしてのヘーゲル受容史:ジュディス・バトラー『欲望の主体——ヘーゲルと二〇世紀フランスにおけるポスト・ヘーゲル主義』」『週刊読書人』2019 年 11 月 1 日 坂本尚志「『分析手帖』と『マルクス=レーニン主義手帖』1960 年代フランスにおける学知、革命、文学」『フランス語フランス文学研究』115 巻(2019)、pp. 255-269 西迫大祐「ジャック・ヴェルジェスの司法戦略とミシェル・フーコーの哲学について」『法を使う／紛争文化』(法文化叢書)(国際書院、2019 年 11 月)、pp. 207-229 MEZZADORA, Sandro, Class Struggle, Labor Power, and the Politics of the Body, ZINBUN, 50 (March 2020), pp. 57-69. 〈翻訳〉佐藤嘉幸:ジュディス・バトラー『権力の心的な生—主体化=服従化に関する諸理論(改訳新版)』(共訳)(月曜社、2019 年 12 月) 箱田 徹:サンドロ・メツァードラ「ヨーロッパの難民・移民と階級をどう見るか? 境界研究の理論的視座」(共訳)『季刊ピープルズプラン』第 86 号(2019 年 11 月)、pp. 24-35 【公開講演会】MEZZADORA, Sandro Mezzadra, Foucault and Marx in the Contemporary World: War, Governmentality and Beyond(フーコーとマルクス 現代世界における「戦争」と統治性)(6 月 15 日) 【公開シンポジウム】公開国際シンポジウム「批判と真理——パレーシアについて」(1 月 25 日) SABOT, Philippe, Subjectivité, Critique, Vérité(主体性、批判、真理) 市田良彦「ソフィストはいかにしてパレーシアストになったか?」【公開セミナー】公開セミナー Vérité et fiction selon Michel Foucault(1 月 26 日) SABOT, Philippe, Michel Foucault et les aventures de la vérité SAKAMOTO, Takashi, De l'imaginaire à l'esthétique : les fictions chez Michel Foucault

7. 研究成果公表計画および今後の展開等

本共同研究は本年度で制度的に終了するが、研究班ユニットの緊密性を保ちつつ、2020 年度一年間をかけて、最終報告書を編集、刊行する。準備されている報告書は、いずれも書籍の形で、以下の通り 2 冊を予定している。1/ 班員全員の論考を網羅する主要な報告書。本拠点の研究成果出版助成を利用し、岩波書店から 2021 年 3 月刊行の予定。2/ 本研究班の運営資金を補助する目的で班員 2 名(佐藤嘉幸、立木康介)によりそれぞれ獲得された科学研究費補助金によるプロジェクトのメンバー(全員が本研究班に所属)の論考、及び、本研究班主催のシンポジウム・講演会における外国人研究者の報告の翻訳を収録する論集。当該の科研費を充当し、水声社より 2021 年 3 月刊行予定。いずれの論集についても、すでに執筆者及び論文テーマのラインナップは確定しており、1 については 2020 年 9 月 6 日、2 については同 9 月 30 日を原稿執筆の締め切りとする。

